

【総評】

平成 23 年度の美術館運営について、まず、「優れた写真・映像作品の計画的・効果的な収集」であるが、写真美術館では基本方針及び収集指針が明確に立てられており、これら方針・指針に基づく収集が適切に行われている。特に、19 世紀末の貴重なコレクションを更に充実させる独自の収集方式は、特筆に値する。また、寄贈作品が量、質ともに注目すべき数にのぼっており、当館に対する社会的信頼度の向上を表すものと理解できる。

次に「的確な作品管理」であるが、写真美術館は目標水準を高く設定し、的確に作品管理が行われている。とりわけ、温湿度のきめ細かいチェックと、徹底した作品の管理は、他の多くの美術館よりも優れていると言える。

また、「調査・研究」面においては、陸前高田市立博物館の東日本大震災による被災写真資料の洗浄とデジタル化について、館をあげての支援活動に展開したことを評価する。こうした社会活動が、調査・研究に根ざしたものであることはいうまでもなく、写真美術館が新たな活動領域を開拓したことを意味している。

「展覧会」では、年間を通して黎明期の古写真から現代までの写真の歴史、写真の訴求力の形成と展開、新しい写真や映像の表現などを主題として、収蔵展、自主企画展は多様な機会の提供に配慮したものとなっている。また、来館者数については、東日本大震災の影響が残っている年度でありながら、昨年度を上回る結果となり、数値からは十分に評価できる。

「映画の誘致と上映」については、ドキュメンタリーの佳作を集めるなど、ラインナップに一貫性が見られ、映画の選定等については、昨年度より向上している。理想的には、映画上映作品と映像作品収集が呼応していれば、写真美術館としてさらに魅力あふれるものになるであろう。

「普及教育活動」では、展覧会に関連した講演会のほか、スクールプログラムなど目的にあわせて多様にかつ着実に実施されている。また、ギャラリートークの参加者が増加したことは喜ばしいが、その運用方法については、なお、研究の余地があろう。

「図書資料」については、美術館の専門図書室として、写真に関する文献、情報収集、それらの整理と提供など、非常に高い水準を維持し、堅実に活動しており、十分に評価できる。

「広報宣伝」においては、写真美術館はその広報手段を確立しており、館独自で開拓し、実現に向けて取り組む姿勢は評価できる。特に、記者懇談会の実施や自主新聞広告、若者をターゲットにしたヴィジュアル広報誌ニアイズの発行など、創意を重ね、集客に結びつけている。

「来館者サービス」面では、カフェ、ミュージアムショップなどの弾力的な運営など、写真美術館の組織力を発揮し、改善を心がけている姿勢を評価する。特に、ミュージアムショップにおける写真集や展覧会図録などの品揃えは、望ましい水準にある。

「企業・団体等の参加促進」については、厳しい経済状況下において、写真美術館が独自に進める支援会員制度を定着させ、支援会員数、会費総額ともにこれまでの最高を記録し、成果を上げていることを高く評価する。

また、「地域との連携強化」については、恵比寿映像祭など、それが館にとってどの面が有効であるかなどを検証し、戦略を立てる必要があり、今後の課題として検討を望む。

「インフラ」面では、設備の維持、管理は適切に行われているが、館の老朽化に伴い、開館 20 周年に向けて大規模改修が予定されているので、エレベーターの増設を始め、ロビー、エントランス周辺の改善など、建物のハード面での改善を期待したい。また、来館者への安全確保や収蔵資料の保護の観点からも、東京都に対して十分な対応をお願いするものである。